

安倍能成

自然主義に於ける
主観の位置

自然主義に於ける
主観の位置

一

自然主義論が近頃の文壇に繰返される様になった。これを見て無用の論議と嘲あざける人もある。回顧すれば自然主義なるものが唱説せられてから、已に三四年にもなるであろう。今になって自然主義の本体如何いかにを論ずるのは、あまり気のきいたことではないかも知らぬ。固より求め強いて論ずべきことであるまい。さりながらこの問題が、

今に至つても尚お、文壇に於いて疑点のある問題である限り、不明なる解釈を存する限り、我等は之を論ずるに何の遠慮も入らない。論ずべき必要のある限は論じ抜いてよいことである。

近頃問題になつて居るのは、自然主義文学の内容性質範囲等に関することである。即ち自然主義文学の根本問題である。かくの如き問題は、自然主義に賛する者と自然主義に賛せぬ者とを問わず、自然主義に満足する人と満足せぬ人とを問わず、公平に論ずべき問題であると思ふ。従来の状態は、一方では自然主義が文学上にも人生

観上にも我等の取るべき唯一の主観であつて、これより外には価値ある文学も人生観もない様に主張せられると同時に、又他方には自然主義といえ、俱ともに天を戴いただかざる仇敵きゆうてきか、又は一日も許す可べからざる邪道の様に見えるに居た。此の間に立つて自然主義の本体が十分に明かにせられなかつたのは、止むを得ぬことかも知れない。「ミネルヴの梟ふくろうは早く飛び立つ」という風なことを言つた哲学者があるそうである。その事の明かに知悉ちしつせられた時には、已に次のモメントに移らんとして居るものであるという意味に聞いた。我々の経験に於てもこのこ

とは事実である。我々が我々の生活に批判を加える時は、多くは已に其の生活を離れようとして居るか、又は少くとも一わたり of 経験を経て来た後のことである。今日自然主義というものも、批判せらるべき時代になったのであると思う。

然しながら一言弁じておきたいのは、我々が自然主義にあきた嫌らないと云うことを、直ちに自然主義を脱却してしまつたことの様云いなすのは、自ら為にする所の誇張である。自然主義を以て近代主観の一切を尽すこと of 出来ぬは勿論である。又自然主義を以て近代文学のあら

ゆる要素を尽すことの出来ないのも勿論である。然しながら近代思想近代文学の中に、自然主義的要素が重大なる位置を占めて居ることは、恐らく誰人も疑わぬ所であろう。我々にとって自然主義はアルファにしてオメガではない。しかし我々が向後全然自然主義的思想を脱却し^{おお}了することが出来るか否かは疑問である。又自然主義が文学上に取った方法の如きも、向後尚お長く用いられるものもある。唯吾人が自然主義的思想を以て物足らずとして、更に何物をか求めんとするのは、吾人の要求であって又自由である。

自分が今迄自然主義について論じたのは、主として自分の問題としてであつた。自然主義的思想人生觀は、自分にとって強き興味を牽^ひく所の問題である。自然主義に對する自分の考が何れいずに傾いた所が、それは何々派の攻撃何々派の弁護を企図してのことではない。自分の自然主義に對する興味いずの中心は、人生觀上の自然主義である。従つて又文芸上の自然主義、哲学上の自然主義にも興味を感ずる。しかし自分は決して歐洲の近代文芸を「かみしめた」とか、精神を了解したとかいふことを、天下に向つて公言し得る勇氣と資格とをふた両つながら欠く者であ

る。自分の文芸に対する知識は極めて浅薄である。又哲学上の自然主義とても詳しくは知らない。自分の自然主義に関する議論は、主として自分の貧小な経験や、又この経験に対する反省考察から成り立って居るのであるから、或は誤解があるかも知れない。この辺は特に文芸史や哲学史の知識に豊かな諸君からの教示を願いたい。さりながら根拠も理由も何もない様な漫罵まんばは、固より受附くる義務を感じない。

自分は嘗て国民文学欄で片上天弦君と、自然主義の本領範圍について論じた。これについて片上君は四月の早稲田文学誌上で、自然主義の主観的要素と題して、自分の所説に対して非難を試み、又片上君自身の考を詳説して居られる。然し不幸にして自分は片上君の説によって、自分の嘗て同君に提出した疑問の解決せられたるを見ない。自分の自然主義観は同君によって一つも改められない。しかしこの前の自分の文章は短くもあり、又自分で

も粗笨そほんであると思うから、今又同君の所説を批評して、更に自分の自然主義に對する考を述べたい。文学上の自然主義ということを全然描写の上にのみ限る人もあるが、片上君は在来の所説でも又今度の論文でも、いつも自然主義的的人生觀と離さないで論じて居られる。僕もこの点は同感であるから、主として人生觀の方面からして文学上の自然主義に論及したいと思う。しかしかかる問題は今迄度々絮説じよせつを累ねたことかさであるから、往々にして重複の点があるであろうと思う。

三

自分の考える所では、自然主義の本領はあくまでも現実に終始する点にある。即ち人生観上に於ては、あくまでも現実を離れず、現実そのままの生活をなし、芸術上に於ては、この現実をありのままに描写するというより外には出でない。

しかしながら今迄度々いった如く、唯単に漠然と現実の二字を振り翳かざした所で、自然主義の能事おわ了れりとしたものではない。現実という語を極めて広く解すれば、吾

人の経験意識に上るものの一切すべて現実である。自然主義にいう現実が、自然主義的現実ともいうべき特殊の解釈見方の下に見られた現実でなければならぬこと、亦、度々云った。漫然として現実を懷疑するとか、発見するとか、現実の中に最高靈を発見するとかいっても、これは要するに空むなしき響に過ぎない。現実なる都合好き一語に自然主義の特質を誤魔化し去るのは極めてずるい手段である。

片上君は哲学上から来た自然主義的人生観の心持と、文学に於て取扱う自然主義的人生観の心持ていちようという鄭重

なる区別をせられたが、この一事については後に論ずることとして、議論の順序上片上君が文学に於て取扱う自然主義的人生観と言われたものをば、片上君の意味する自然主義的人生観と見、之について愚見を陳べる。これは片上君にも異議はないことと思う。

自然主義に於ける現実観、従つては人生観上の自然主義なるものが、哲学上の器械論、唯物論、感覺論、決定論等即ち一言には哲学上の自然主義に論拠を置いて居るところとは、恐らくは誰人も認むる所であろう。然しながら片上君が称して自然主義的人生観というものは、純粹にはか

くの如きものではない。片上君は此等の器械的物質的
生観に対する吾人の主観の抗争を以て、自然主義的
観の肝腎なる要素として居られる。そしてかかる主観
的精神的靈的要求を呼んで、徹底的要求といつて居られる。

然しながら自分の見る所では、片上君が好んで用いる
徹底的という語は、極めて不徹底的に用いられて居る。

片上君は自ら自然主義者と名乗る人であるから、其の徹
底とは自然主義的徹底であろうと思つて居たのに、それ
がどうもそうでないらしく見える。片上君は如何に強弁
しても、其の所説には明かに自然主義的的人生観一点ばり

では到底満足が出来ないということを発表して居る。即ち自然主義的的人生觀に於ては、主觀的心靈方面の生活が全然無視せられるに堪えないから、更にこの心靈的方面からして人生の新しい価値を感得したいと云って居られる。片上君は又一方に於いては、人生の物質的器械的感覚的方面をも、出来得るだけしみじみと味って見たいと言つて居られる。或は片山君の徹底的要求とはこの方面に徹底することかと思つた所が、やっぱりそうではないらしく、かかる人生觀に抗争する方の要求を徹底的と呼んで居られると見える。此辺の片上君の考は実に不徹底

を極めて居る。相反した二つの徹底的要求があるのかと
思うとそうでもない。又一方の主観的要求を徹底的要求
としながら、其の消極的であることを承認して居る。即
ち心霊の方の徹底的要求は消極的徹底的要求というもの
になるのである。

吾人は唯主観の動揺あるが故に徹底的要求を持つ者で
はない。吾人は唯焦燥煩悶するを以ての故に徹底的要求
を有するとは見られない。若し吾人がこの徹底的要求な
るものをあくまでも徹底的ならしめんとすれば、吾人は
物質的的人生観とあくまでも抗争し、これを排斥して、吾

人の精神的靈的要求を貫かねばならない。然しながら、かく徹底し了おおせんとする要求、又徹底し了したる所に、何処どこに自然主義的的人生觀の片影が残るだろうか（靈肉合致という様なことをいうけれども、或る特殊の人を除いては、それは唯漫然と唱えられて居るに過ぎない）。かくて片上君の所謂徹底的要求なるものは、消極的徹底的要求である。吾人は一方に於ては物質的器械的的人生觀の多大なる圧抑を受けて居る。又かくの如き人生のあくまでも事実なることを認めなければならぬ。然るに一方に於て我等の徹底的要求たるものは消極的である。かくの

如き生活に於て果して何の徹底があるうか。若し徹底があるとするれば、徹底とは小桶この中おけに入れられた魚が鼻をつくとということと同意義でなければならぬ。若し靈的要求が吾人の要求であるならば、吾人の徹底的要求は靈に於て満足せられねばならぬ、靈的人生に於て満足せられねばならぬ。物質の岩石にうち当ることを以て徹底ということとは出来ない。

自分が自然主義的人生觀に於て吾人の徹底的要求を持つることの難かたきを云つた所以はここにある。吾人の靈的要求なるものが熾烈なれば熾烈なる程、吾人は自然主義

的たるに遠ざかるは明かなることである。

一方に於て自然主義的人生觀に支配せられ、他方に於て又靈的精神的要求を棄^すてることの出来ない我々が、自然主義的人生觀の下にあつて、極めて不徹底の心持を経験して居ることは、片山君の徹底的という語が如何に不徹底的に用いられて居るかを見ても証明せられる。若し吾人にして自然主義的に徹底せんとするならば、吾人は飽くまでも自然主義的人生觀に従つて、世界人生の器械的なるを認め、無解決なるを認め、意志の自由を否定し、一切の価値的判断を徹して、偏^{ひとえ}に自然力の跳梁^{ちようりよう}に一

身を委^{まか}して、生死の海に流沈しなければなるまい。

かくの如き徹底的自然主義的人生観が宗教的たるに遠いことは固よりである。吾人が嘗て凡そ宗教的たるに遠いこと自然主義より甚しきはないといったのも、かかる消息からである。吾人新人の宗教的要求なるものは在来の宗教的要求とは違うといった人があるが、仮令^{たと}如何なる宗教にしる、現実（自然主義的）に止まり、現実を離れない所に、吾人の宗教的要求はあり得ない。吾人の主観が極めて消極的状态の下にある自然主義的人生観が、吾人の宗教的要求なるものを生^おい立たすべき沃土^{よくと}でない

ことは固よりである。吾人はかくの如き人生観の下にあつて、吾人の宗教的要求なるものの弱められ狭められたことを感ずる。吾人の主観が焦燥し煩悶しても、自然主義的的人生観はこの焦燥この煩悶の力無き果敢なきものたるを感ぜしめる。吾人はかかる状態の下にあつて、清新強烈なる主観を振り立てようとしても、中々六かしい。吾人はかかる時我が生の遂に醉生夢死に果てて、唯茫茫たる物質の大海裏にかつ消えかつ結ぶうたかたの如きを観ずる。しかも近代人なるものに来世の思慕があるわけでもない。かかる状態の下にあつて、なお弛ゆるみなく自分

の主観的要求を把持^{はじ}し、偏に徹底的なるを勉^{つと}め得られる人は強者である。しかし自分にはこの人生観が一転せねば、到底そんな充実した生活は出来ぬ。尤も上に云った如き生活が、やがて吾人を宗教的要求に促す一転機になることはあり得るであろう。さりながらこの状態を続ける処に宗教的要求は育たない。これより脱せんとし又脱する処に宗教は始めて生れるのであると思う。

然し又片上君の立場からいえば、自分のいう如きものは自然主義的人生観ではないというかも知れない。さりながら君のいう様に物質的人生と精神的^{たいじ}要求とを対峙せ

しめたものと、一筋に自然主義的に徹底して人生を見んとする見方と、何れが自然主義的的人生観であるかは、殆ど説明を要しないことである。

四

自然主義的的人生観に於ける主観の位置状態について、尚少しく述べて見たい。このことは已にしばしば屢言しばしばしたことである。又片上君の論文が載って居るのと同じ早稲田文学に、金子筑水氏の委くわしい議論がある。自分の説は片上

君の説と自分の考との差違を明かにするだけに止めたいと思う。

自分の考は、自然主義的的人生観に於いては、人間の主観が占める位置は極めて狭小貧弱であるというにある。何となれば自然主義的的人生観は、一口には人間を自然化せんとする人生観である。かかる人生観の下にあつては、自ら進んで創造せんとする情意の方面よりも、一に外圍に感して之に影響せられる感覺的方面が重んぜられるのは、自然の勢いきおいである。自然主義的的人生観に於ては、吾人の主観すらもやがては物質化し、器械化し、決定論的

たらずば止まざらんとするのが、其の徹底的傾向である
ということとは明かである。そしてこれは唯吾人が哲学史
に於て読み覚えた事実ばかりではない。吾人の日常経験
に於て心持の上にリアライズすることの出来るものであ
る。即ち自然主義的的人生観が徹底的になればなる程、主
観の特殊性は薄れ、次第次第に環境に同化せられ、環境
に支配せられる所の傾向が盛になって、遂に吾人は感覺、
神経を有する一個の生物たるに止まって、殆ど情意の境
界を守り難くなるであろう。かくて自然主義的的人生観に
於ては、外が主になって内が客になる。この傾向を称し

て客観的であつて主観的でないとも云い得る。又主外的であつて内部的でないとも云い得る。仏国啓蒙期時代の哲学が与えた人生観はかくの如きものであつた。かかる人生観が人生無解決論に至るのは、当然の帰結である。

しかしながら近代思想に於ても最も強いのは、個人主義的傾向である。近代人なる者は自己意識が極めて強い。されば一方に於て自然主義的的人生観が、次第に吾人の主観を侵蝕して、極めて受動的なる状態に置くと共に、一方に於てはその侵蝕せられたる自我なるものの自意識は極めて鋭敏であつて且つ強い。自分が嘗て自己意識と自

己の現実との矛盾と云つたのはこの点である。我等の主観の特殊的内容は極めて貧弱であるのに、外因より影響せられて之に刺戟せられる感受性は甚だ鋭敏で、その度毎に煩しく自己の意識を喚起せられる。近代人なる者が感覺の微妙や神経の過敏を誇にするのも、一面には彼等の主観の内容の空虚を補充せんとする努力と見られはしないか。

之を要するに自然主義的人生観は主外的なるを特徴とする。吾人の主観は特殊性を失つて、偏に受動的消極的たらんとする。

五

然し自分が上に述べた所の人生観上の自然主義なるものに対し、片上君は一の抗議を提出して居られる。即ち自分のいう如き自然主義的人生観なるものは、哲学上の自然主義の生活上の気持であつて、「自然主義の文学の蔵する生活の気持」ではない。又上に云つたのは「自然主義文学が採る材料としての生活状態」であつて、「それに加えられる作者の批判、即ち自然主義文学の精神」

はこの外に存するという説なのである。片上君の言は一見した所では如何にも尤もらしい様だけれども、よく考えて見ると随分矛盾極まるものである。片上君のこの言は、自分が嘗て「哲学上の自然主義は物質的人生観であるが、文芸上にはロマンチズムの傾向が、自然主義の大切な点である」ということは、更に氏の委しい説明を待たねば解し難い」といったのに対する同君の答の一部である。片上君は、哲学上文学上の自然主義は物質的人生観を奉ずる点では、一見同じ様でありながら、然も根本に於いて違って居るといふ、然らば其の根本的差違は何

かときくと、哲学的人生観に於ては主観の抗争というものがなく、矛盾の感がなくて、楽観的である。之に対して文学上の自然主義に於ては、主観の抗争があり、悲痛苦悶矛盾がある。即ち哲学上の自然主義では主観がそのまま之を受容れ、文学上の人生観では、主観がこれに対して抗争するといふのである。即ち柔順と抗争とが哲学上の人生観と文学上の人生観との心持の違である。更に言い加うれば、哲学上の自然主義に抗争する主観的要求が、文学上の自然主義を成立せしむるものである。かくの如きは哲学若しくは文学の根本性質上必然的にかくあ

らねばならぬものであるか、或は文芸史上若しくは哲学史上の事実であるというのか。片上君の宣言は極めて独断的であるけれども、それは深く追究するの必要がない。自分が片上君に聞きたい本題は外にある。

自分はここに至って又前に言ったことを繰返すより外はない。片上君の所謂哲学上の自然主義的人生観なるものに抗争する精神的、靈的若しくはロマンチックの要求なるものは果して自然主義的であるか、即ち靈的、精神的、ロマンチックということと自然主義的ということとは同意義若しくは相調和し得べきものであるかということこ

とである。片上君が哲学上の自然主義的的人生観を以て単に自然主義文学の材料と見、主観の抗争を以てこの批判と見ることも粗笨な考方であると思うけれども、其は問はずとして、この批判なるものは果して自然主義的になされたる批判なりや否やを問いたい。更に自然主義文学とは哲学上の自然主義的的人生観を材料として、之に靈的ロマンチックの批判（自分を以って見れば非自然主義的なる）を加える所に成り立つものであるかを聞きたい。自分は上の疑問を提出しただけで、自分の考はよく分ることと信ずる。

片上君の誤あやまりは、純粹に自然主義的でないものを偏に自然主義なりと強弁せんとする点にある。

自然主義の文学が物質的的人生觀を偏に主張するということは、或は事実でないかも知らない。然しながら自然主義の文学に於ては、物質的器械的人生を、眼を蔽おおえども耳を塞ふさげども認めざるを得ない現実の姿として認める。吾人の主觀がこの為にどんなに圧迫せられても、如何に焦躁苦悶しても、この現実を脱せざる所又脱せんとせざる所、即ち現実と生死を共にする点にこそ、自然主義的的人生觀は維持せられるのである。されば物質的的人生

観に基づく人生の現実は、自然主義文学に於て大いなるエムフアンスを置かれて居る。主張したとかせぬとかいうのは、要するに不徹底なる弁解である。

多くの文学的作品又は文学者を捕えて来て、即ち文芸史上より自然主義的作品又は作家を例示するのは、面倒なことではあるが、近代文学に委しい人があつて之を試みれば有益であろう。しかしながら同一作品同一作者にも自然主義的部分もあり、然らざる部分もある。従つて自然主義の作家といつても、其の主要なる特徴について言う所の大まかな称呼になる様なことも免れま

い。しかし文壇に自然主義なる旗幟を掲げて之を説明する場合には、其の概念は明瞭で其の特相は鮮かでないければならぬ。

六

自分は更に進んで自然主義文学に於ける描写の態度に
関して少しく陳べて見たい。

自然主義的的人生観なるものが主外的なりという意味に
於て客観的であることは已にいった。そして自分は自然

主義文学に於ける描写の態度も、この人生観の規定を受くるを免れないと思う。この点に於て自分は両者の共通性を認める。

自然主義文学に於ける描写の態度は、客観的に現実の姿を唯ありのままに描写し、之を品隲ひんしつせず、取捨按配あんばいせざる所にあると思う。この点に於て自分は田山花袋氏の作家として行くべき所まで行こうとする態度を壮なりとする。片上君は客観尊重、排主観ということを偏に描写の上のみ限って居られる。そして曰うには、「主観の動揺を表白するのであるが、唯抒情的情緒的に歌うので

はない。其の歌うべく想うべき主観の動揺を引き起した外的物的の諸事物諸事件を出来るだけ客観的に描写して、その殆ど純客観的に描出せられたような結果が、その諸事物諸事件が招いた主観の動揺を、当事者自身と同じ様に若しくは其の以上に深く広く思い味わしめることを期する」とある。

実に念の入った説明である。さりながらかくの如き描写と雖いえども、作者及び読者の自然主我的人生観を予想するにあらずば、決してエフエクチーヴにはなるまい。固より作者としての人間と、実行者としての人間との態度

を全然同一視することは出来ないけれども、然も自分は其の自然主義的描写なるものを、自然主義的な人生の見方と全然別にすることは出来ない。たとえば一口に主観の動揺といつても、主観の動揺にも色々ある。主観の動揺が環境を描くことによつて如実に写されるというけれども、これはやっぱり無意識的に作者及び読者の人生の見方を予想しての上であると思う。かくいう意味は要するに自然主義的描写法を以て描かれた人生は、広くいえば自然主義的的人生観の下に見られた人生であるということである。例えば主観の動揺を環境から描くのは、主観の

動揺を常に環境より離して見ない人生の見方に基づくものである。若しこの主観の動揺なるものが極めて自由な空想的なものであれば、其の描写の態度は又変更せられねばなるまい。かの徹底自然主義者と聞く一派が、周囲が感覚に印したままを一つも取捨せずしてそのままに描くという如きも、人間の主観を感覚化せざれば止まざらんとする自然主義的人生観と通ずるものであるうと思う。

更に自然主義の描写に於ける価値判断を撤して、事実をありのままに見んとする態度の如きも、自然主義的人生観の、偏に現実の動きなき姿を見せて吾人の価値的要

求を杜絶せんとする傾向と相通ずるものである。されば片上君のいわゆる沈黙の慟哭どうこくなる者は、自然主義文学を自然主義文学たらしむるに欠く可べからざるものでないとしても、客観的無選択的無解決的態度は、自然主義的描写が徹底的に進まんとして向う所の的であろうと思う。

最後にいう。自分は自然主義的思想に不満足な者である。そして自分は片上君を以て純粹なる自然主義者と見ない。却て自然主義的思想に不満足でありながら、実に自然主義の名に執着せんとする人と見る。

(明治四十三年四月)

日本文学電子図書館

自然主義に於ける主観の位置

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館